日蓮大聖人御書全集

まつのどののごけあまごぜんごへんじ

松野殿後家尼御前御返事

新版
2000
〜
2004

松野殿後家尼御前御返事

弘安2年('79)3月26日　58歳　松野殿後家尼

法華経第五の巻の安楽行品に云わく「文殊師利よ。この法華経は無量の国の中において、乃至名字をも聞くことを得べからず」云々。

この文の心は、我ら衆生の三界六道に輪回せしことは、あるいは天に生まれ、あるいは人に生まれ、あるいは地獄に生まれ、あるいは餓鬼に生まれ、畜生に生まれ、無量の国に生をうけて、無辺の苦しみをうけて、たのしみにあいし

かども、一度も法華経の国には生ぜず。たまたま生まれたりといえども、南無妙法蓮華経と唱えず。となうることはゆめにもなし。人の申すをも聞かず。

仏のたとえを説かせ給うに、一眼の亀の浮き木の穴に値いがたきにたとえ給うなり。

心は、大海の中に八万由旬の底に亀と申す大魚あり。手足もなく、ひれもなし。腹のあつきことは、くろがねのやけるがごとし。せなかのこうのさむきことは、雪山にたり。この魚の昼夜朝暮のねがい、時々剋々の口ずさみには、

腹をひやし、こうをあたためんと思う。赤梅檀と申す木をば聖木と名づく。人の中の聖人なり。余の一切の木をば凡木と申す。愚人のごとし。この梅檀の木は、この魚の腹をひやす木なり。あわれ、この木にのぼりて腹をば穴に入れてひやし、こうをば天の日にあててあたためばやと申すなり。

自然のことわりとして、千年に一度出ずる亀なり。しかれども、この木に値うことかたし。大海は広し、亀はちいさし、浮き木はまれなり。たといよのうきぎにはあえども、梅檀にはあわず。あえども、亀の腹をえりはめたるように、

腹 冷 温 思 赤梅檀 申 木 名 人 聖 余 一切 木 凡 愚 木 梅檀 魚 腹 冷 上 腹 穴 入 温 当 日 甲 天 こう 理 千年 一度 出 亀 難 値 希 浮 木 値 梅檀 彫 嵌 亀 腹

がい分に相応したる浮き木の穴にあいがたし。我が身おち入りなば、こうをもあたためがたし。誰かまたとりあぐべき。また穴せばくして、腹を穴に入れえずんば、波にあらいおとされて、大海にしずみなん。

たとい不思議として栴檀の浮き木の穴にたまたま行きあえども、我が一眼のひがめる故に、浮き木西にながるれば東と見る故に、いそいでのらんと思っておよげば、いよいよとおざかる。東に流るるを西と見る。南北もまたかくのごとし云々。浮き木にはとおざかれども近づくことはなし。

かくのごとく無量無辺劫にも一眼の亀の浮き木の穴にあいがたきことを仏説き給えり。

この喩えをとりて、法華経にあいがたきに譬う。たとい値えども、となえがたき題目の妙法の穴にあいがたきことを心うべきなり。大海をば生死の苦海なり、亀をば我ら衆生にたとえたり。手足のなきをば善根の我らが身にそなわらざるにたとえ、腹のあつきをば我らが瞋恚の八熱地獄にたとえ、背のこうのさむきをば貪欲の八寒地獄にたとえ、千年大海の底にあるをば我らが三悪道に堕ちて浮かびがたきに

譬

たとえ、千年に一度浮かぶをば三悪道より無量劫に一度人間に生まれて、釈迦仏の出世にあいがたきにたとう。余の松の木・ひの木の浮き木にはあいやすく、梅檀にはあいがたし。一切経には値いやすく、法華経にはあいがたきに譬えたり。たとい梅檀には値うとも、相応したる穴にあいがたきに喩うるなり。たとい法華経には値うとも、肝心たる南無妙法蓮華経の五字をとなえがたきにあいたてまつることのかたきにたとう。

東を西と見、北を南と見ることをば、我ら衆生、かしこ

顔がおに智慧有る由をして、勝を劣と思い劣を勝と思う、得益なき法をば得益あると見る、機にかなわざる法をば機にかなう法と云う、真言は勝れ法華経は劣り、真言は機にかない法華経は機に叶わずと見る、これなり。

されば思いよらせ給え。仏、月氏国に出でさせ給いて一代聖教を説かせ給いしに、四十三年と申せしに始めて法華経を説かせ給う。八箇年がほど、一切の御弟子、皆、如意宝珠のごとくなる法華経を持ち候いき。しかれども、日本国と天竺とは二十万里の山海をへだてて候いしかば、

法華経の名字をだに聞くことなかりき。釈尊御入滅ならせ給いて一千二百余年と申せしに、漢土へ渡し給う。いまだ日本国へは渡らず。

仏の滅後一千五百余年と申すに、日本国の第三十代欽明天皇と申せし御門の御時、百済国より始めて仏法渡る。また上宮太子と申せし人、唐土より始めて仏法渡させ給いて、それより以来、今に七百余年の間、一切経ならびに法華経はひろまらせ給いて、上一人より下万人に至るまで、心あらん人は法華経を一部、あるいは一巻、あるいは一品

持って、あるいは父母の孝養とす。されば、我らも法華経を持つと思う。しかれども、いまだ口に南無妙法蓮華経とは唱えず。信じたるに似て信ぜざるがごとし。譬えば、一眼の亀のあいがたき栴檀の聖木にはあいたれども、いまだ亀の腹を穴に入れざるがごとし。入れざればよしなし。須臾に大海にしずみなん。

我が朝七百余年の間、この法華経弘まらせ給いて、あるいは読む人、あるいは説く人、あるいは供養せる人、あるいは持つ人、稲麻竹葦よりも多し。しかれども、いまだ

阿弥陀の名号を唱うるがごとく、南無妙法蓮華経とすすむ勧る人もなく、唱うる人もなし。一切の経、一切の仏の名号を唱うるは、凡木にあうがごとし。いまだ栴檀ならざれば腹冷をひやさず、日天ならざれば甲温をもあたためず。ただ目肥をこやし心を悦ばしめて、実なし。花さいて菓仕業なく、言のみ有ってしわざなし。

ただ日蓮一人ばかり日本国に始めてこれを唱えまいらすること、去ぬる建長五年の夏のころより今に二十余年の間、昼夜朝暮に南無妙法蓮華経とこれを唱うることは一人なり。

念仏申す人は千万なり。予は無縁の者なり。念仏の方人は有縁なり、高貴なり。しかれども、師子の声には一切の獣、声を失う。虎の影には犬恐る。日天東に出でぬれば、万星の光は跡形もなし。法華経のなき所にこそ弥陀念仏はいみじかりしかども、南無妙法蓮華経の声出来しては、師子と犬と、日輪と星との光くらべのごとし。譬えば、鷹と雉との等ひとしからざるがごとし。

故に、四衆とりどりにそねみ、上下同じくにくむ。讒人、国に充満して、奸人、土に多し。故に、劣を取って勝を

にくむ。譬(たと)えば、犬(いぬ)は勝(すぐ)れたり師子(しし)をば劣(おと)れり、星(ほし)をば勝(すぐ)れ日輪(にちりん)をば劣(おと)るとそしるがごとし。しかるあいだ、邪見(じゃけん)の悪名世上(あくみょうせじょう)に流布(るふ)し、ややもすれば讒訴(ざんそ)し、あるいは罵詈(めり)せられ、あるいは刀杖(とうじょう)の難(なん)をかぶる。あるいは度々(たびたび)流罪(るざい)にあたる。五(ご)の巻(まき)の経文(きょうもん)にすこしもたがわず。されば、なんだ左右(そう)の眼(まなこ)に浮(うか)び、悦(よろこ)び一身(いっしん)にあまれり。

ここに、衣(ころも)は身(み)をかくしがたく、食(じき)は命(いのち)をささえがたし。例(れい)せば、蘇武(そぶ)が胡国(ここく)にありしに、雪(ゆき)を食(じき)として命(いのち)をたもつ。伯夷(はくい)は首陽山(しゅようざん)に住(すみ)し、蕨(わらび)を折(おり)て身(み)をたすく。父母(ふぼ)

にあらざれば誰か問うべき。三宝の御助けにあらずんば、いかでか一日片時も持つべき。いまだ見参にも入らず候人の、かように度々御おとずれのはんべるは、いかなることにや、あやしくこそ候え。法華経の第四の巻には、釈迦仏、凡夫の身にいりかわらせ給いて、法華経の行者をば供養すべきよしを説かれて候。釈迦仏の御身に入らせ給い候か。また過去の善根のもよおしか。竜女と申す女人は、法華経にて仏に成りて候えば、末代にこの経を持ちまいらせん女人をまぼらせ給うべきよし誓わせ給いし。その御

ゆかりにて候か。貴し、貴し。
縁 そうろう たっと たっと

弘安二年己卯三月二十六日
こうあんにねんつちのとうさんがつにじゅうろくにち

松野殿後家尼御前御返事
まつのどののごけあまごぜんごへんじ

日蓮 花押
にちれん かおう